



**Data** 2023-29

監督・脚本：パク・チャヌク

出演：パク・ヘイル / 湯唯 (タン・ウェイ) / イ・ジョンヒョン / コ・ギョンピョ / キム・シニョン

## 👁️👁️ みどころ

韓国のパク・チャヌク監督は、故キム・ギドク監督と同じく、“どぎつさ”が特徴！？そのため、『オールド・ボーイ』（03年）や『親切なクムジャさん』（05年）をはじめとする大傑作は、物語の面白さや衝撃度はもとより、エロ度とサド度も突出！

ところが、中国の美人女優・湯唯（タン・ウェイ）をヒロインに起用した本作は“珠玉のサスペンスロマンス”にもかかわらず、エロ度もサド度もゼロ！“官能的で耽美的、SM的テイスト”だった『お嬢さん』（16年）とは大違いだ。

そんなパク・チャヌク作品には何の魅力もなし！そんな意見も考えられるが、さにあらず！松本清張の正統派推理劇とは異質ながら、翻訳アプリ、スマートウォッチ等のIT機器を駆使した、敏腕刑事と夫殺しの容疑者とされた美人妻との会話劇と心理劇は面白く、かつ奥が深い。

冒頭の舞台は山。夫の転落死からはじまる本作は、2番目の夫の死亡を経て、ラストの舞台は海になるが、その対比もお見事！1度でわからない人は2度でも3度でも挑戦し、本作の面白さをしっかり確認したい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■パク・チャヌク監督が大変身！？でもカンヌで監督賞！■□■

韓国は、ポン・ジュノ監督をはじめ、ものすごい監督が多いが、その中の1人がパク・チャヌク。私は彼の『お嬢さん』（16年）（『シネマ39』189頁）の評論で、次のとおり書いて、『お嬢さん』の紹介に続けた。すなわち、

『オールド・ボーイ』（03年）（『シネマルーム6』52頁参照）と『親切なクムジャさん』（05年）（『シネマルーム9』222頁参照）の衝撃度はすごかった。その後の『湯唯』

き』(09年)、『シネマルーム24』未掲載)はイマイチだったが、ハリウッド進出を果たした『イノセント・ガーデン』(12年)ではミステリアスなストーリー展開に驚き、衝撃の結末には口あんぐりだった(『シネマルーム30』131頁参照)。

同作の「みどころ」でも、「韓国人俳優がしゃべる日本語の違和感は大きい。しかし、それを差し引いても本作の面白さは抜群だし、エロ度(?)とサド度(?)も突出!」、「さあ、あなたは如何に騙される?パク・チャヌク監督の映画づくりの構想力と騙しのテクニックに脱帽!」と書いた。さらに、本文でも、「官能的で耽美的、SM的で倒錯的なテキストに注目!」、「耽美趣味二態に注目!」等の「小見出し」を掲げた。そんな“作風”は、故キム・ギドク監督と同じだが、日常的な男女の会話劇で物語を紡いでいく作風のホン・サンス監督とは正反対だ。

そんなパク・チャヌク監督の『別れる決心』と題された最新作たる本作は、チラシによると「刑事と容疑者は、ひとつ目の殺人で別れ、ふたつ目の殺人で再会する。疑うほどに惹かれ合う、珠玉のサスペンスロマンス」と、本作に見るパク・チャヌク流のエロ度とサド度は如何に?そう思っていると、本作にはエロもグロも全く登場しないらしい。それはホント?本作はホントにパク・チャヌク監督作品なの?しかし、それでも本作はカンヌで監督賞を受賞しているから、やっぱりパク・チャヌク監督はすごい!

### ■韓国映画だがヒロインは中国人! 敏腕刑事との会話は? ■

本作は韓国映画だが、ヒロインは私の大好きな中国人女優、湯唯(タン・ウェイ)。私が彼女をはじめて観たのは、李安(アン・リー)監督の『ラスト、コーション』(07年)、『シネマ17』226頁)。R18指定とされた同作での、過激なセックスシーンを堂々と演じた彼女の女優魂に脱帽したものだ。続く毕贛(ビー・ガン)監督の『ロングデイズ・ジャーニー この夜の涙で』(18年)、『シネマ46』194頁)では、前半(2D)はドレシーな濃い緑色のワンピース姿で、後半(3D)はオカッパ頭のスポーティな姿で登場する、美人女優タン・ウェイに注目が集まった。

本作は、そんな中国が誇る美人女優、タン・ウェイ演じるソン・ソレの夫が山登りの最中に転落したところから物語が始まる。普通に考えればこれは事故死だが、念のためその捜査に当たったのが、最年少で警視に上り詰めた、プサン警察署の実力派刑事、チャン・ヘジュン(パク・ヘイル)とその部下のスワン(コ・ギョンピョ)だ。夫が亡くなったのに悲しんだり泣いたりしない、若く美しい妻の姿に、スワンは彼女が犯人ではないかと疑ったが、ヘジュンは偏見ではなく実直に捜査を続けるように指示。そんなヘジュンに対して、ソレは「私は中国人だから、韓国語はうまくない」と説明。さらに、取り調べ室でヘジュンが「夫の亡くなった状況を説明するのに、言葉と写真のどちらが良いか」と尋ねると、ソレは最初は「言葉で」と答えたものの、その後、「写真で」と言い直すことに。さて、そのココロは?

## ■□■不眠症刑事の張込み監視から、アレシ恋愛感情が？■□■

松本清張の小説『張込み』は2人の刑事の徹底した“張込み”を描いた面白い小説だった。それを映画にした野村芳太郎監督、橋本忍脚本の『張込み』（58年）も素晴らしい作品だった。それとは状況が異なるものの、本作では夫の死亡後、介護人として高齢女性の元で働くソレの動静を、スワンとともに張込み監視するヘジュンの姿が徹底的に描かれる。

ヘジュンは原発で働いている妻アン・ジョンアン（イ・ジョンヒョン）とは週末だけ共に過ごす“週末婚”の生活を続けていたから、平日は夜でも仕事は可能。そんなこともあって、ソレのアリバイ調査等を進めているヘジュンにとっては、ソレの監視は捜査のため不可欠らしい。もっとも、ヘジュンは重度の不眠症だったから、どうせ眠れないのなら、夜を徹して車の中からソレの動静を監視していても同じだ。そんな割り切り（？）もあって、ヘジュンはソレの張込みに励んでいたが、飼っている猫と中国語で会話しているソレの姿はかなり魅力的。さらに、スマートウォッチで録音したその言葉を翻訳してみると「あの親切な刑事の心臓が欲しい」と出てきたからビックリ……。しかし、それを見ると、ソレはヘジュンのことをまんざらでもないと思っているのでは……？

そんなことを考えながらソレの張込みを続けていると、次第にヘジュンの心の中にはソレに対する恋心の芽生えが……。さらに、夢かうつつか状態の中、ヘジュンは時にはソレの側に自分が立って直接話をしている幻覚を見るまでに。いくら若手の優秀な刑事だといっても、そこまでくれば、ちょっとヤバイのでは……？

## ■□■言葉が通じなくても、翻訳アプリさえあれば！■□■

近時のAIの進歩は、各種テクノロジーの領域はもとより、囲碁や将棋の世界でも著しい。その中でも、近時目立っているのが翻訳アプリだ。翻訳する言語を指定して日本語で入力すれば、直ちに英語、中国語、スペイン語、ドイツ語等々に翻訳して表示され、しゃべってくれるのだから、こりゃ便利。日本のコマーシャル界では、現在、明石家さんまがその威力を誇示している（？）が、本作では中国語がまるでわからない韓国人のヘジュンと韓国語が少ししか喋れない中国人のソレとの間で、翻訳アプリを使うことによって、2人間の会話を成り立たせるシーンが随所に登場するので、それに注目！コマーシャルで見ている風景のように、お互いに全く他国語が喋れない者同士でも、翻訳アプリを使えばそれなりの会話が成り立つが、本作で翻訳アプリを使いこなすのは、もっぱらソレ。したがって、本作では、ソレが翻訳アプリが必要だと考える場合のみ、この小道具が登場するので、その点にもしっかり注目（注意？）したい。

他方、本作の大半を占めるヘジュンによるソレの張り込み監視のおかげで、ヘジュンはソレの私生活についてもかなりの情報通になっていた。例えば、「ご飯は食べましたか？」と聞くソレに対して、ヘジュンが「またアイスですか？」と逆質問できるのは、ソレがアイスクリームばかり食べていることを張り込み監視のおかげで知っていたためだ。その張り込み監視では、ヘジュンが持つスマートウォッチが大活躍しているから、前述のように

少し変な韓国語になってしまうとはいえ、ソレがしゃべっている内容をヘジュンは知ることができるわけだ。そのため、もともと言葉が十分に通じない取調官 VS 被疑者という関係ではじまったヘジュンとソレの関係でも、さまざまな情報交換が可能になったから、その関係が長くなれば長くなるほど情報交換（交流？）の量も拡大、増大していくことに。松本清張の推理小説は時刻表のトリックをふんだんに使った『点と線』をはじめとして面白いものばかりだが、さすがに、ここではAI機器を活用したトリックは使われていない。それとの対比と言う意味も含めて、パク・チャヌク監督の本作では、AI機器をフル活用したトリックの面白さを、たっぷり味わいたい。

## ■□捜査の進展は？「刑事モノ」としての面白さは？■□

韓国は『殺人の追憶』（03年）（『シネマ4』240頁）をはじめとして、「犯罪モノ」「刑事モノ」の傑作が多い。しかし、ハッキリ言って、本作にそれを期待すると裏切られるかもしれない。なぜなら、若手ナンバーワンの敏腕刑事であるヘジュンの捜査も、その対象が美人妻になると、私情が入り混むためか、あれこれと横道にそれてしまうためだ。その“迷走”ぶりは、張り込み監視中に自分がソレの部屋の中に入り込んで会話している幻想（？）を見るくらいだからかなり深刻だ。また、いかに妻とは週末婚だとしても、自分の部屋に被疑者を呼び込むのが禁じ手なら、「自分が唯一知っている中華料理はこれだ。」と言って、焼き飯を作ってやるのもダメ。ソレは、「これが中華料理ですか？」と首を傾けつつ食べて、「味はおいしい。」と言っていたが、さてそれは本当？さらに、カーテンの奥にびっしり貼られた、殺人事件の写真をソレに見せるのも、それが未解決事件であるだけに、もっとダメ。白中堂々と刑事が夫と死に別れた人妻とこんなことをしていることが上層部にバレたら、ヘジュンは即謹慎処分になってしまうのでは？

他方、そんな心配をよそに、ソレの捜査はそれなりに進んでいくから、それは松本清張の正統派推理小説と同じように、本作でもしっかり楽しみたい。もっとも、ソレの携帯とソレが世話していた介護老人の携帯が同じ機種だったとか、ヘジュンが証拠の携帯をソレに渡して誰にも見つからないように海に捨ててしまうよう指示したりするストーリー展開は、複雑でわかりづらいので、要注意。

## ■□舞台はプサンからイポ市へ。再会後また殺人事件が！■□

それから数年後！これは小説でも映画でもよく使われるフレーズ、手法だが、本作の「それから数年後」の舞台は、ヘジュンの妻が働いているイポ市になる。ヘジュンにとっては、週末だけの夫婦生活が解消され、晴れて夫婦が同居できるのだから、プサンからイポ市への転勤はウェルカムのはずだが、どうも内心はそうでもないらしい。なぜなら、ヘジュンにとっては、プサンで起きたソレの夫死亡事件の捜査が中途半端なまま転勤してしまったからだ。さらに、それと共に、ソレへの想いもあったから・・・？

そんなヘジュンが妻と一緒に市場で魚を見ている時、偶然再会したのがソレと新しい夫だったから、ビックリ！ソレは、ヘジュンのことを、シャーシャーと「私のことを疑った

刑事」と夫に紹介していたが、それは一体なぜ？そんなふうには、夫婦同士で偶然で会った4人は互いに自己紹介をして別れたが、本来それ以上何の接点もないはずだ。ところが驚くことに、その直後、イポ市ではじめての殺人事件が発生！ヘジュンがイポ市での新たな部下のヨンス（キム・シニョン）と共に現場に駆けつけると、多数の切り傷を負い、プールの隅に座らされていた被害者は、何とソレの新しい夫だったから、ビックリ！なぜプサンに続いてイポ市でも、自分の管轄内で、ソレの夫が死亡したり殺されたりするのか？そんな思いで、ヘジュンはソレに対して、「このためイポ市に来たのか？ふざけるな！」と言ってしまったが、それは、いかに普段は冷静なヘジュンでも仕方ないだろう。もっとも、犯人は左利きだと判断されたところ、ソレは右利きだし、夫に詐欺被害を受けた人物が左利きで夫殺しを認めたから、この殺人事件は意外にもすんなりと解決。

しかして、犯人が捕まったことをソレに報告するべくヘジュンがソレの家に向かうところから、イポ市を舞台にした本作最後のストーリーが展開していく。そこで明らかにされるのは、ソレが中国から韓国にやってきたのは、祖父母と母の遺骨を山の中に撒くためだったということ。ところが、それを終えたソレは、同行していたヘジュンに抱きつき、あれこれと告白するので、私たち観客はヘジュンと共にそれをしっかり確認したい。そして、その後の舞台を山から海に移して展開していく本作ラストの、アッと驚くストーリーは、あなた自身の目でしっかりと！

2023（令和5）年3月6日記